

氏 名	石井 翔子
学 位 の 種 類	博士（人間文化科学）
学 位 記 番 号	甲第人 16 号
学位授与年月日	2015（平成 27）年 3 月 18 日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第 3 条第 3 項第 1 号
学 位 論 文 題 目	正岡子規自筆『竹乃里歌』の語彙研究 (A Study of the Vocabulary in Masaoka Shiki's <i>Take no Satouta</i> )
論 文 審 査 委 員	主査 教 授 金子 彰 副査 教 授 大久保 喬樹 副査 教 授 今井 久代 副査 佛教大学大学院文学研究科教授 坪内 稔典

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

本論文は、正岡子規（慶應 3 年～明治 35 年）自筆『竹乃里歌』の短歌に使用されている語彙の使用実態とその特色とを語学的に分析し論述したものである。短歌に使用された全語彙は、独自に作成した『正岡子規自筆『竹乃里歌』『竹乃里歌拾遺』語彙総索引稿』（未刊）を用いて把握した。どのような内容を表す語彙が多く詠まれているのか、その増減に注目し、子規の短歌に詠まれる語彙の取捨選択の過程を、年代を追って探ったものである。

子規は早くから古典和歌を学んでいるが、明治三十一年に自身の短歌革新の主張の一つとして、伝統的な古歌に捉われない趣向を詠むことを挙げ、古典的和歌からの脱却を宣言した。その方法として、伝統的手法としての雅語（和語）に限定せず、俗語や外来語（漢語・欧米語）をも必要であれば積極的に用いることを主張した。「七たび歌よみに與ふる書」に「趣向の變化を望まば是非とも用語の區域を廣くせざるべからず、用語多

くなれば従つて趣向も變化可致候。…文學にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候はゞ如何なる者が出來候べき。…漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。」と述べている。

子規短歌の語彙が当時の近代短歌の中でどのような位置付けにあるのかを検証するために、同時期に短歌革新を唱え実践した歌人の落合直文、与謝野鉄幹、与謝野晶子の作品と比較し検証を行った。特に、革新が顕著であった与謝野鉄幹を取り上げて比較分析したものである。

取り扱った子規自筆短歌は、作歌年代が明らかな2432首である。底本としたのは自筆本『竹乃里歌』の複製本（講談社）とそれを翻刻した講談社版『子規全集』第六卷（講談社）である。

【第一部】は、子規が独自に作成した分類語彙表「たね本」の分野語彙ごとに、子規短歌の全語彙をあてはめ分類した。子規による分類語彙表の項目は「人倫・女流・人名・器物・服装・宮室・人事・獸類・鳥類・爬蟲類 其他・蟲類・魚類・植物・天文・地理・時令・飲食・肢體・無形名詞・數字・色彩・形容詞・副詞・自動詞・助詞・他動詞」である。全短歌語彙の分類後、特に「器物・宮室・服装・人事・自然物・動物」語彙を取り上げて子規短歌を分析した。子規は一年ごとに大きく表現の変化を見せており、その変化の様相を明治三十年以前、三一年（短歌革新宣言）、以後一年ごとの三五年（没年）まで分析した。

子規も明治三十年以前は伝統的な和歌の世界にあり、花鳥風月的な自然語彙や、「恋」などの語彙が多い。三一年の短歌革新宣言で、子規は短歌に写生（視覚表現）の方法を取り入れた結果、題材の内容や語彙の拡大が見られ、古典和歌的な題詠語彙が減少した。明治三二年・三三年は歌材として、「ガラス」など人工物語彙が使用される。三四年以後は病状の悪化で病床にあることから眼で見る庭の「牡丹」などの身の植物語彙の使用が大きくなる。没年の明治三五年でも、一層身近な内容が歌材として選択される。明治三一年を境に詠まれることが減少していた自身の境遇を詠んだ作品が見られるのである。

○いちのはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす（拾遺三八四・三四年）

【第二部】は、子規短歌の外来語（漢語と欧米語）について分析した。革新宣言の三一年以降、漢語使用の拡大が顕著であり、古歌（本稿では江戸時代までの和歌）では殆ど詠み込まれない漢語で表される内容の語彙も、子規は積極的に歌材としている。欧米

語の使用も、事実の提示や、写実的な描写をする作品に多く用いられている。

○《ビードロ》の《ガラス戸》すかし向ひ家の棟の薺の花咲ける見ゆ（一四二一・三三年）

この子規の傾向は、与謝野鉄幹と晶子の欧米語使用が、叙情的、空想的描写の一環として使用されているのと対照的な特徴である。

○久方のアメリカ人のはじめにし《ベースボール》は見れど飽かぬかも（八〇八・三一年）

「久方の」が「あめ（天）」に掛かる枕詞であることを欧米語に応用した技巧的な使用も子規は見せている。このような欧米語の積極的使用は、同じく短歌革新を唱えた鉄幹や晶子よりも早い時期に開始されている。

【第三部】は、植物語彙、気象語彙と天体語彙、地名語彙について分析した。

植物語彙は、「森」などの植物の集まりを表す語彙の使用と、「木陰」などの植物によって生まれた陰を表す語彙の使用とが特徴である。比較した鉄幹短歌では、植物の集まりと植物によって生まれた空間（陰）を表す表現が少ない。子規短歌に多く見られた植物による陰（暗色）と陰の中のもの（明色）の配合も、鉄幹短歌には少ないものである。

気象語彙・天体語彙は、気象語彙と天体語彙に対する感覚表現について、子規短歌が視覚表現に偏っていることを明らかにした。これは子規の写生の実践が如実に表れたものである。また聴覚表現などを視覚表現で補い得るという子規の表現も見られる。

○西晴れて白帆群れ行く海原の入日にそゝぐ《夕立の雨》（三四三・三一年）

「入日にそゝぐ」と「夕立の雨」は写生的な表現であり、「夕立の雨」には聴覚表現の音に関する表現がされていないが、激しく降っている聴覚音の連想ができるという表現法である。

地名語彙は、i) 現地の人以外の読み手にとって分かりづらい地名語彙の、短歌への使用傾向が小さい。ii) 「～驛」「～停車場」「～街道」「～港」という形の交通施設名の使用が、短歌には見られない。iii) 「播州」のような漢語で表現された日本の地名を詠むことが少ない。

また子規短歌は、古歌に拠った地名語彙の使用が少なく、「日の本」といった国家に対する意識を表現する地名語彙の使用が見られることも特徴的である。

○フランスのパリス少女は《日の本》の扇手に持ち君を待つらん（一六二一・三三年）

自国と他国とを並べて表現するのは、子規の新聞記者としての経験によるところも大

きい。「フランス」を挙げることで、「扇」を「日の本」のものであると強調する表現に、世界に対しての自国を意識する子規の近代人としての姿勢が見られるのである。

【第四部】は、人物語彙について分析した。

人物語彙は人名、生産業の従事者、傷病人、「賤」を表すもの、「白玉少女」など老若美醜を表現する女性の語彙が見られた。このような人物語彙は鉄幹短歌では例の少ないものである。また期間を下るに従い、「人」に対する視覚表現の使用が多くなり、聴覚表現の使用が少なくなる傾向が見られる。写生の方法を短歌に用いるという、短歌革新での姿勢をここでも見る事が出来る。鉄幹短歌と比較すると、子規の方が人物語彙の内容は豊富であり、鉄幹で多く見られる「人」の容姿や様子（「美し」や、感情による身体の変化（「笑む」）が殆ど詠まれていない。それは、子規短歌では、「人」そのもののみが主題になることが、鉄幹と比べて少ないためと考えられる。

## Ⅱ. 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

本論では次の四部構成をとっている。

序章 本稿の目的と方法

#### 第一部 語彙分類論

器物語彙・宮室語彙・服装語彙…人工物を表す語彙の分析。

人事語彙 …人間の精神、活動、活動によって生まれた語彙の分析。

動物語彙 …人間以外の生物を表す語彙の分析。

自然物語彙 …自然物を表す語彙の分析。

#### 第二部 外来語論

短歌に用いられている外来語（本稿では漢語と欧米語）の分析。外来語使用が独自のものであるのか、落合直文と与謝野鉄幹、与謝野晶子との比較を通しての検証。

#### 第三部 自然語彙論

植物語彙…植物の種類や部位、群生している植物を表す語彙の分析。

天文語彙…気象や天体やそれによって生じた現象を表す語彙の分析。

地名語彙…地名を表す語彙の分析。

鉄幹短歌に使用されている自然語彙との比較を通しての検証。

#### 第四部 人間語彙論

人物語彙…人間や神仏を表す語彙の分析。

鉄幹短歌に使用されている人物語彙との比較を通しての検証。

結章

附章 子規の分類語彙一覧

## 2. 論文の特徴

正岡子規は、語彙の収集とその語彙分類に努めた文学者である。本研究もその子規の方法に倣ったものである。子規の短歌の全語彙を最初に収集してそれを分類し、子規短歌に使用された語彙全体の提示から、子規短歌の実態と変化とを具体的に示したものである。どのような語彙が短歌革新後に詠まれるようになり、または詠まれなくなるのか、また歌風や歌論の変化によって使用語彙にどのような変化が見られるのかが本研究で明確に示された。子規の特徴を捉えるために、古典和歌の語彙からどう脱却したのかを実証的に論じた点や、当時の短歌革新を唱えた他の歌人の用語を比較分析したことで、子規短歌の用語がどのような性格を持つものであったのかを明らかにすることができたものである。

子規の短歌を対象とする研究は、文学関係からの研究が盛んである。代表的な短歌を捉え、それを解釈しそこから子規を演繹的に論じる方法が多く見られる。本論文が取った語学的方法は、全く異なる方法からのものである。関連する多くの語彙を把握して初めて、従来の研究が見落としてきたことを指摘したことも多くあった。松山市立子規記念博物館、法政大学子規文庫所蔵の子規の自筆文献には、子規自身の書き込みも多く、それらを閲覧調査して子規自身の注釈のことばを知り得た作業も貴重であった。本研究は、自筆本の調査に徹する姿勢を貫き、多量の語彙データを総索引としてデータ化した研究であった。子規短歌の全語彙の分類は行ったが、すべての分野語彙の分析は完了してはいない。今後の継続研究にその成果が期待される。

中間審査で指摘を受けた内容を解決した点も多くあった。正岡子規といえば俳句と言われるが、この短歌と俳句との関連が今後の研究課題でもある。題材の配合などは俳句から得た方法であろうし、明治三十一年の短歌革新発表が、先立って発表された明治二八年の俳句革新宣言とどう関係するのか。今後の発展的研究課題も多く残されている。

### 3. 論文の評価

審査委員から、本論文が示した語学的実証方法による分析が、多くは解釈から入る文学研究に刺激的方法であるとの発言がなされた。対象とした短歌の分析から得られるものとは異なる子規像が把握でき、そういう方法に切り込んだ点も評価された。そうは言っても子規語彙を採録した用例報告の観が強く、それを分析することに少し薄いという指摘もあった。この点に関しては、子規の短歌語彙の全体把握をしたものの報告自体が未だなく、先ずその実態報告を丁寧に行い、そこから特徴と位置付けとを行おうと意図したのだと発表者からの応答があった。別に、今回の語彙認定に「複合語」の「桜／の／花」を「桜の花」と採録しているが、子規語彙の把握のために「複合語」をどう認識するのか等の質問もあった。子規短歌は複合語を認定してこそ子規の語彙が把握できるのではないかとの「語」の認識の応答があった。

論文の構成と分析の記述とが中間論文以降良く整ったものになり、また各章が密接に関連して論理的となったと評価もされた。子規短歌との比較対象を与謝野鉄幹に取ったことで、鉄幹短歌に見られる抒情的な表現と対比して、子規短歌の写生的な表現を顕著に見ることができ、論述も平板に流れない立体感が感じられた旨の評価も示された。明治初期の文学界において子規の短歌の革新が、どのように位置づけられるのかを更に考察する必要があるという指摘もなされた。子規は多くの才能あふれる知友、弟子たちに囲まれた生涯を送り、新聞社勤務者として当時の最先端の文学の潮流を諸外国から知り得る環境の中にいた。その中で子規は独自に何を成し遂げようとしたのか、成し遂げたのかを、更に今後とも実証して論じて欲しいという指摘もあった。総じて、子規短歌の語彙データを独自に収集処理して分析した原稿用紙にして1600枚の論文は労作であり、厳密な資料分析を主眼とする本論文で示された成果は、当該研究に一つの楔を打ち込むような意義ある研究であった。

本学課程博士の学位水準に達しているものとみなされた。

### 4. 最終試験の概要

#### ① 博士論文最終試験、論文発表会（公開）

2015年2月18日午前10時30分～12時30分に実施した。申請者が用意した博士論文最終審査のレジュメをもとに40分間、本論文の目次、既発表論文との関連、既口頭発表との関連、先行研究と本研究との位地づけ、研究の目的、分析資料、

全体の構成、研究方法、各章の要旨、中間審査から本論文へ、今後の課題という順で説明が行われた。その後、主査の金子、副査の大久保、今井、学外審査委員の坪内が質問と講評とを行った。更に、フロアーからも質問が出され質疑が行われた。

② （外国語（英語））

2015年2月18日午前9時20分～10時20分に筆記試験を実施した。総合して博士後期課程の学生にふさわしい水準に達していると判断された。

以上のような最終試験の結果、学外審査委員を含む四名の審査委員の全員一致により、本学課程博士号を授与するにふさわしいと認めた。